◆『戦史秘話』　第三話 ◆

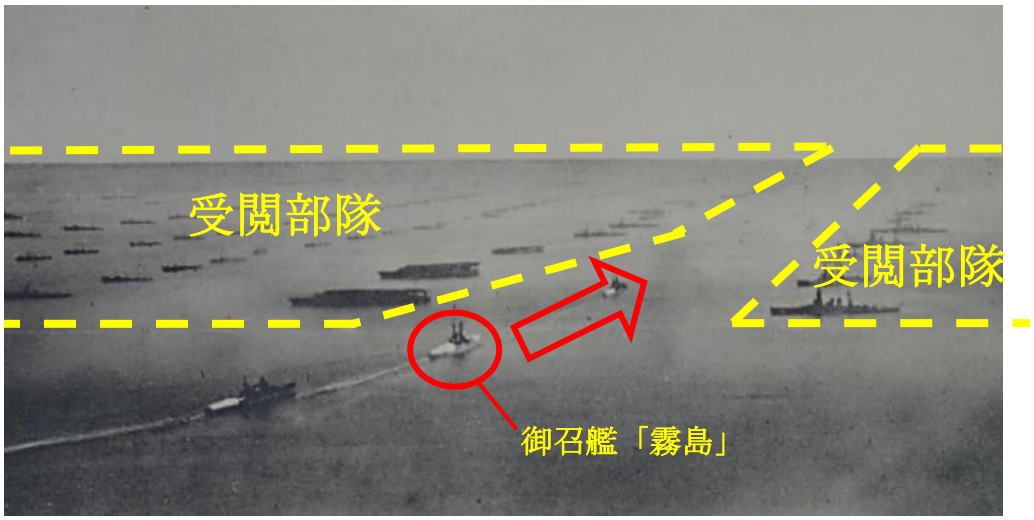
# 日本海軍観艦式こぼれ話

## 昭和５年特別大演習観艦式

「朕茲ニ親シク大演習ヲ統裁シ且艦隊ノ威容ヲ閲シ士気愈々旺盛ニシテ作戦用兵ノ進歩著シキヲ覩朕深ク之ヲ嘉ス （中略） 汝等益々奮勵シ教心戮力上下一致以テ國防ノ大任ヲ完ウセンコトヲ期セヨ」(「昭和五年特別大演習写真帖」より。大意:「諸君、益々奮励し一致協力して国防の大任を全うせよ」)

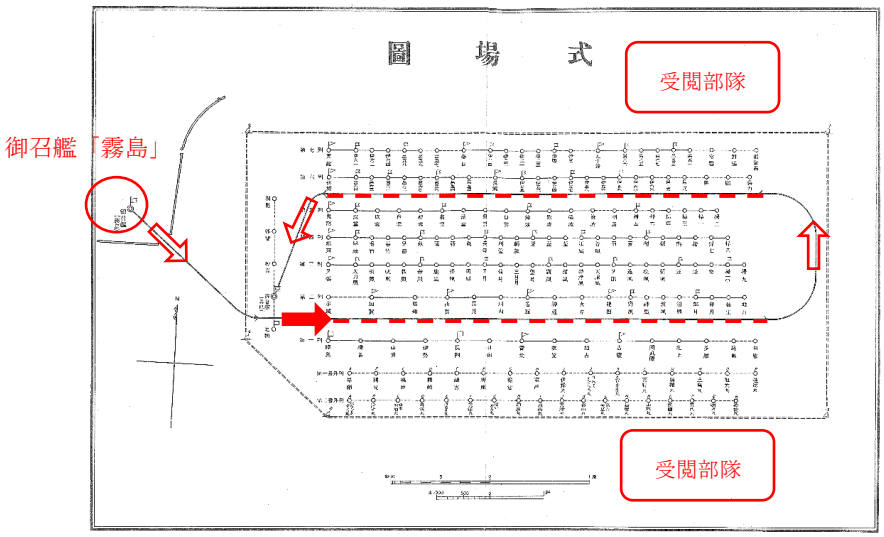
これは、昭和５年(1930 年)10 月 26 日に神戸沖で執り行われた「昭和５年特別大演習観艦式」の際に昭和天皇から海軍大演習参加部隊に対して発せられた勅語の一部です。この日、海軍大演習に参加した部隊は、観艦式に臨むこととなりました。

防衛研究所の戦史研究センター史料室には、「観艦式の栞」(昭和５年 10 月　海軍省作成)という史料が残されています。中を読んでみると、この昭和５年の観艦式に際して作成された資料であるのが見て取れます。この栞によると、「観艦式とは、多数の艦船が式場たる予定錨地に碇泊していて、その前を君主または大統領が乗艦に依って各艦船の威容を親閲する、恰も陸軍観兵式の閲兵式に似たる最も荘厳なる儀式であります」(旧字旧仮名使いを改め　以下同じ)とされています。現在の、海上自衛隊の観艦式のように、観閲艦が受閲部隊と次々にすれ違う方式とは、だいぶ異なっているのがわかります。




上の写真は、当時の観艦式の様子を上空から写したものです。御召艦「霧島」が各艦船の間を通り、「御親閲」を行っている際の写真です。写真中の○のついているのが御召

艦、進行方向は矢印の方向となります。栞によると、御召艦「霧島」は、「足柄」を先導艦とし、「妙高」、「那智」、「羽黒」を従えて「静々と航進」する、とされています。また、航空機も参加し、「天高き秋の空には、群れをなしたる飛行機隊が整然とした壮快なる分列を行います」と記されています。




## 観艦式の歴史

第 1 回の観艦式は、明治元年 3 月、天保山沖(大阪)で行われました。そのときの参加艦艇はわずか 6 隻、合計の排水量は「僅に 2452 トン、現在の一等駆逐艦 1 隻よりも少し大きい位のものでありましたが、これが今日の大観艦式の源をなしたものと思うと、そこに光輝ある感を禁じ得ないのです」と記されています。

「栞」には、観艦式の一覧表が掲載されています。

観艦式一覧表

| 年月日 | 場所 | 名称 | 艦 隻数 | 船 順数 | 航空機 |
|---|---|---|---|---|---|
| 明治元、三、二六 | 天保山沖 | 観艦式 | 六 | 二、四五二 | |
| 明治二三、四、一八 | 神戸沖 | 海軍観兵式 | 一九 | 三二、三二八 | |
| 明治二三、四、二〇 | 神戸沖 | 大演習観艦式 | 四九 | 一二九、六〇一 | |
| 明治三六、四、一〇 | 神戸沖 | 大演習観艦式 | 六一 | 二一七、一七六 | |
| 明治三八、一〇、一三 | 横濱沖 | 凱旋観艦式 | 一六六 | 三二四、一五九 | |
| 明治四一、一一、一八 | 神戸沖 | 大演習観艦式 | 一二三 | 四〇四、四六〇 | |
| 大正元、一一、一二 | 横濱沖 | 大演習観艦式 | 一一五 | 四六〇、八二五 | 飛行機 二 |
| 大正二、一一、一〇 | 横須賀沖 | 恒例観艦式 | 五七 | 三五三、九六五 | 同 四 |
| 大正四、一二、四 | 横濱沖 | 特別観艦式 | 一二四 | 五九八、八四八 | 同 九 |
| 大正五、一〇、二五 | 横濱沖 | 恒例観艦式 | 八四 | 四七二、二五四 | 同 四 |
| 大正八、七、九 | 横須賀沖 | 御親閲式 | 二六 | 八六、〇一三 | |
| 大正八、一〇、二八 | 横濱沖 | 大演習観艦式 | 一一一 | 六二四、一八〇 | 同 |
| 昭和二、一〇、三〇 | 横濱沖 | 大演習観艦式 | 一五八 | 六六四、二九二 | 飛行船 一八 |
| 昭和三、一二、四 | 横濱沖 | 大禮特別観艦式 | 一八六 | 七七八、八九一 | 飛行機 一三〇 |
| 昭和五、一〇、二六 | 神戸沖 | 昭和五年特別大演習観艦式 | 一六五 | 七〇三、二九五 | 飛行機 七二 |

## 「移動式」観艦式に関する研究

戦史研究センターの史料室には他にも興味深い史料が残されています。当時、海軍省

が作成した文書を綴った「公文備考」という冊子が多数残されています。これは、海軍省が部内の報告等を項目別に分類して保存した書類の綴りです。そのうち、昭和3年に開催された「御大禮観艦式」(昭和3年12月4日横浜沖)に際して、実施方法を検討した文書が残されています。興味深い史料なので、ご紹介します。

昭和3年5月、第一艦隊参謀長(注:当時浜野英次郎海軍少将)から海軍省軍務局長(注:左近司政三海軍少将)に送付された「移動観艦式案並所見」です。これによると、移動式については①天候の障害を受けやすいこと、②一般艦船の航路の限定が必要、③一定の時間に限定することが困難、との理由を挙げた上で、「実施は相当の困難」としています**【後掲史料①】**。この結論に対して、軍務局員であった杉山六蔵海軍中佐も、「①陛下にとっても連日大礼の儀で連日多忙を極める中、3時間も費やすことは畏れ多い、②当日の天候に左右される、③服装、賜餐等の関係上不便が多い」と移動式は時宜に適さないと意見を付しています**【後掲史料②】**。

ただ、左近司軍務局長は、移動式については未練があったようで、「本件、種々の実行難あるをもって、御大禮観艦式は従前通り碇泊式となし後年大演習観艦式のとき移動式研究のことしかるべく」と後年の大演習観艦式の時に移動式を研究するように意見を付して決裁をしています**【後掲史料③】**。

次の大演習観艦式は、先ほど述べた昭和5年でしたが、結論として、移動式ではなく、停泊式で行うこととなったようです。なお、日本海軍によるこの後の観艦式は最後の「紀元二千六百年特別観艦式(昭和15年)」に至るまで停泊式で執り行われました。

## 艦上の昼食

昭和3年の大禮観艦式の際に「榛名」艦上で開かれたパーティ

同じ「公文備考」には、「賜饗ニ関スル件」という史料が綴られています。「賜饗」とは、天皇陛下から酒食を賜ることであり、昭和3年の大禮観艦式の際の食事のメニューをうかがう

ことができる史料です。それによると、当日の献立は、「鮭肉蒸冷」(サーモン)、「牛背肉蒸焼冷」(ローストビーフ)、「野禽麺型詰焼」(鴨肉包み焼き)、「燻腿凝汁掛」(ハムのゼリーかけ)、「型寄混菜」(テリーヌ)、「サンドウイッチ」、「果実二種　林檎　蜜柑」、「麺麭」(パン)、「紅茶」であり、洋食であったことがわかります。また飲み物は「日本酒」、「麦酒」、「シトロン」、「平野水」(炭酸水)でした(献立の(　)内は筆者注)。洋食のメニューで、アルコールも提供されていたのに、ワインは無かったようです。

その予算額は、料理が 3 円 20 銭、飲み物が 80 銭、合計 4 円となります。一人あたりの予算と思われますが、昭和 3 年当時、白米 10 キロが 2 円 30 銭、牛肉 100 グラムが 40 銭、コーヒー1 杯が 10 銭程度であったことを考えると、結構高級感のある、メニューと言えると思います。この「賜饗」とは別に、招待者に対して洋食の弁当と飲み物が提供されていたようです。「公文備考」には、このほかにも、当時の「乗艦券」など数多くの史料が残されています。

(戦史研究センター戦史研究室所員　石丸安蔵)

## コラム◆日本海軍における観艦式

日本海軍における観艦式は、明治初期「海軍天覧」、「軍艦叡覧」、「海軍観兵式」などと呼ばれていた。明治 23 年頃以後になり、観艦式と呼ばれ始めたようである。観艦式に関する海軍内の規則は、大正 2 年 10 月に「観艦式規程」が制定された。当時、観艦式の種類は、特別観艦式、大演習観艦式、恒例観艦式の 3 つに区分されていた。その後、各種の検討が加えられ、大正 8 年 10 月には観艦式の種類を「特別観艦式」、「大演習観艦式」の 2 種類とした。その規程は、昭和 5 年には名称を「観艦式規程」から「観艦式令」に改め、「航空機」に関する項目が追加された。

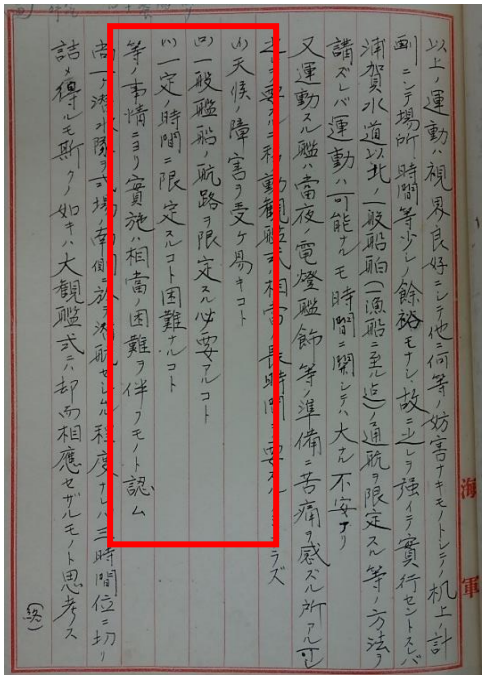
なお、大正から昭和初期に実施された観艦式を区分すると次のようになる。

◎「特別観艦式」:大礼観艦式(国家の大典)や、凱旋観艦式(戦時・事変等において出征した艦隊が凱旋した場合)など。

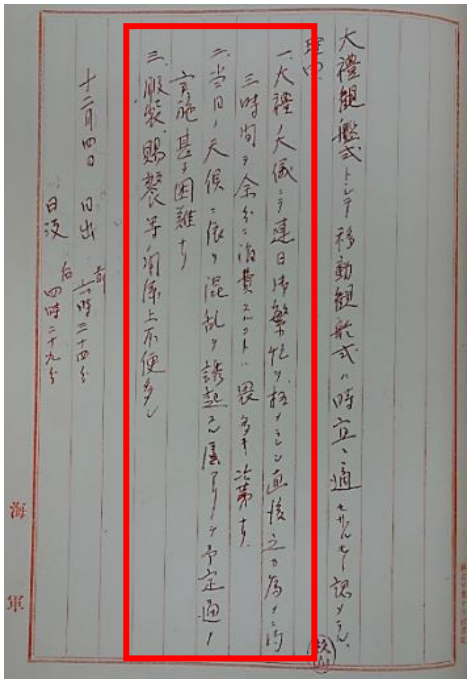
◎「大演習観艦式」:海軍における大演習の直後に、参加艦船をもって挙行される観艦式。

## 後掲資料:「移動観艦式案並所見」

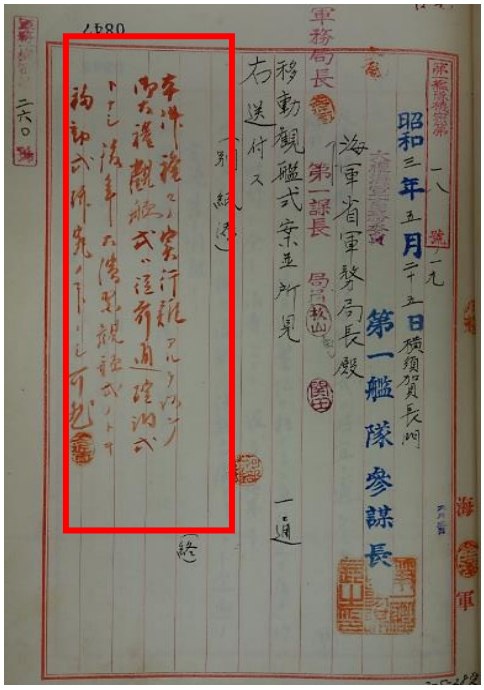
①



②



③



「公文備考　儀制26巻45大礼特別観艦式2」(防衛研究所戦史研究センター所蔵)より

【アジア歴史資料センターHP(https://www.jacar.go.jp/)において閲覧可能、レファレンスコード:C04016132600】